**校友歌「伊吹の峰」**

**その復元と再演をめぐって**

**＊　校友歌の誕生**

昭和２３年に発表されたこの歌は、　作詞　根岸正純、作曲　岐阜市長良小学校教員となっているが、その氏名は不明である。氏名を公表できない理由があったのかとも想像される。（最近当時の印刷物が発見された。）

　歌詞は７・5調の6行で構成されており、有名な第一高等学校（旧制）の寮歌「嗚呼玉杯に」と同じ形である。

豊かな自然に囲まれた環境で、学問と研究・真理を探究すべきことをアッピールしたこの歌は、われわれの心に沁みる響きを持っていた。

同じ年の当校記念祭で開かれた講演会で、坂田昌一博士が戦争という非常事態の中でも、冷静に基礎科学の研究を続けた話を聞いた時の感動とも重なりあっている。

**＊　大学昇格運動の展開の中で**

昭和２２～23年といえば、大学昇格を目指して、学生・

父兄・教職員が一体となって運動していた。この運動の中で、学生の自治意識の高まりと学習・研究意欲の向上をもたらし、その集約として開かれた記念祭では、前記の「坂田博士講演会」の成功という形で結実している。

　まさにこの時期に発表された校友歌は、学園の雰囲気の

象徴であり、産物であるといっても過言ではあるまい。

　しかし、その後のキャンパス移転で、歌詞中の地名への違和感もあり、唄われなくなったことは残念であった。

**＊　作詞者・根岸先生との再会**

平成2年（１９９０年）の夏、名古屋市内で作詞者の根

岸先生と再会した折、話が校友歌のことに及び、それを再

現するための作業にとりかかることになった。

　まず私の記憶している歌詞を送って、それが正しいかどうかを確かめてもらうことにした。その際の先生の返書は

下記の通りである。（8月20日付）

「・・・前略・・・小生作詞の校友歌を憶えていてくれて感謝します。・・中略・・十数年前、記憶を呼びもどしてワープロに入れておきましたので、お役に立ててうれしく思います。ほとんど貴兄の記憶どおりです。一度、古い卒業クラスの会に招かれ（工学部の新キャンパス＜筆者註・昭和２９年の那加キャンパス＞移転直前でした）、一人で歌ったこともあります。同封しますので、青春の心意気を蘇らせるのに活用してください。・・・後略・・・」**＊　幻の楽譜・復元のための試み**

歌詞の問題は解決したが、楽譜が無い状態を何とかしなければならない。民謡などで行われている「採譜」という作業をやる必要がある。メロデイだけは憶えていてもそれを５線譜にするのは至難の業である。　自宅のエレクトーンを使って打ち込み、仕上げるのに数か月かかった。それを楽譜として整備するために、専門家の曲木亜紀（楽器インストラクター）さんに依頼して修正・編曲・テープ化してもらった。さらに再現が正確かどうか検証するために、同年の卒業生に何回か人を変えて確かめる手筈をとった。

この楽譜が後に「岐阜大学工学部五十年のあゆみ」（以後「五十年のあゆみ」と略称）に掲載されたものである。

**＊　青春を記念する唯一の産物**

完成したテープの複製を根岸先生のところへ送り、それに対して次のような返書をいただいた。

「・・・前略・・・本日校友歌のテープ御恵送下され有がたく頂戴しました。早速再生を聞かせてもらいましたが、立派な演奏で感動を覚えました。小生は大げさにいえば工専―工学部のために青春を捧げたようなもので、その記念としての唯一の産物があの歌であり、それを貴兄によって伝えてもらえることはこの上なくありがたいことと思います。・・・後略・・・」（平成3年9月13日付）

**＊　校友歌の掘り起しと再演の試み**

平成24年6月、若井先生（前工学部長）からメールが

届いた。それは「工学部の前身の工専時代、愛唱されていた校友歌があったことを示したい」という内容だった。

そこで「\*五十年のあゆみ」に掲載された楽譜を補正し、その経過とともに発表することにした。若井先生から岐阜大学コーラス・クラブに合唱・演奏を依頼されたところ、2月に実現することとなった次第である。

　笠松校舎の時代に学生と教官が、学校の発展のために汗を流し、青春を賭けて活動していた当時の愛唱歌。それは工学部発展史の一齣であり、その歌を掘り起し、再演することには少なからぬ意義があると思う。

**＜石井英昭　昭和24年卒業　繊維科＞**